

自分史（杉浦喜美子）

作成日：令和 4 年 9 月

昭和 3 年 5 月 3 日	大阪に生まれる
昭和 15 年	阿倍野高等女子卒業
昭和 19 年	昇太郎の姉が新橋駅前にて焼き鳥店を営む
昭和 23 年	杉浦昇太郎と結婚
昭和 24 年 11 月	長男誕生
昭和 26 年 8 月	次男、三男が双子で誕生
昭和 55 年	初孫（利明）誕生
昭和 60 年	杉浦家初の女子孫誕生（蓉子）
昭和 57 年	孫（秀樹）誕生
昭和 61 年	ストレッチ体操を始める（80 歳位まで）
昭和 62 年	孫（苗子）誕生
昭和 63 年	銀婚式を息子たちが祝ってくれる
平成 2 年	閉店
平成 3 年	孫（蒔子）誕生
平成 14 年 5 月 1 日	昇太郎他界（75 歳）
平成 18 年	孫（利明）結婚
平成 20 年	曾孫（雄真）誕生
平成 21 年	曾孫（凜太）誕生
平成 27 年	曾孫（咲良）誕生
平成 27 年 5 月 24 日	米寿お祝い
令和 2 年	右大腿骨骨折（2 ヶ月入院） デイサービスソラノイロ利用開始
令和 3 年	左大腿骨骨折（2 ヶ月入院）
令和 4 年	骨頭壊疽で手術（1 ヶ月入院）

私は、昭和 3 年 5 月 3 日に大阪市港区で生まれました。父（近五郎）と母（ゆき）は、母の父（私の祖父）が仕事先で父を見初め、結婚したと聞いています。長兄は一回り齡が離れていて、商船大学を出た後、私が物心が付いたときには商船会社で働いていました。年が離れているのであまり話したことはないのですが、世界の色々な港に船で行っていたそうです。長兄の次は姉でしたが、私よりも 10 歳ほど年上で、その次に兄が 2 人、数年年上の姉、私、4 歳年下の弟という 7 人兄弟でした。兄弟の中でも、特に 10 歳年上の姉にはよく面倒を見てもらいました。

父は日立造船で働いていました。私が生まれてしばらくは大阪の港区に住んでいましたが、仕事の関係で東住吉区に引っ越しました。大阪と和歌山を結ぶ阪和線の南田辺駅や鶴が丘駅の近くでした。東住吉の家は、土地が 150 坪くらいあり、お部屋が 9 部屋もある大きなお家でした。父は会社で比較的上役だったので大きな家に住み、のんびりと暮らす事が出来ました。家の横には畑があり、その隣には父が大好きな盆栽を育てていました。畑ではなすやキュウリ、トマトやへ

ちまをお育てて旬の時期にそれらを食べました。

東住吉の家では、兄たちの膝に座り家族で麻雀をしたり、踊りやお習字を習わせてもらったりしたのをよく覚えています。兄妹は仲が良く、喧嘩をした記憶はあまりありません。東住吉の家の写真が残っているかどうかは分かりませんが、母の父が遊びに来た時にみんなで写真を撮ったことを覚えています。それがひょっとすると残っているかもしれないなあ、と今思い出しました。

東住吉は今はとても都会だと思いますが、昔は田んぼと畑しかありませんでした。この前テレビを見ていたら、家の近くだった長居競技場が出てきました。今は立派な競技場と綺麗に整備された公園が出来ていますが、私が東住吉にいた頃はまだ競技場はありませんでした。でも大きな公園はあったので、テレビを見て昔を思い出し、とても懐かしく思いました。



結婚前の記念写真

小学校から女学校までを東住吉で過ごしましたが、女学校に入って 1 年位で第二次世界大戦がはじまりました。学校に行くことはなくなり、勤労働員で毎日毎日、早川電機（今のシャープ）に通いました。そこでは半田鋺（はんだごて）で何かの部品と何かの部品をくっつける作業を行いました。何の部品なのか全くわかりませんでした。おそらく戦争で使

うものでしょう。みんなで一生懸命作っていました。女学校は4年生制でしたが、まともに通ったのは初めの1年だけでその後は勤労働員と疎開で学校には通っていません。卒業免状はもらいましたが、いつ誰からどのようなにもらったのかなどは全く覚えていません。その位混乱していた時代だったのだと思います。

大阪での空襲は年々ひどくなり、父は空襲に嫌気がさし、日立造船での専務取締役の職を辞し、早期退職して母の実家近くの愛知県羽塚町（はつかちょう）という名古屋と岡崎の間位のところに疎開も兼ねて引っ越しました。

兄たちは出征し、上の姉は福井県庁に勤める夫と結婚し、下の姉は毎日新聞に勤める夫と結婚していました。弟がどうしたのかははっきりと覚えていないのですが、私は上の姉を頼って福井県に疎開しました。福井まで行くと空襲はなく、ゆっくり過ごせるかと期待していましたが、福井でもひどい空襲に会い、何度も防空壕に入りました。防空壕は誰が作ったのかは覚えていませんが、庭先にあって、5～6人入れる穴でした。福井での空襲は大阪以上で、姉の家は焼け落ち、姉

が生まれたばかりの子供をおんぶし、私が 5 才になる姪っ子の手を引いて逃げたのを覚えています。姪っ子の靴が途中で無くなったり、焼夷弾（しょういだん）で周りの家が焼けたり、とても怖い思いをしたことを覚えています。

姉も姉の夫（義兄）もそんな酷い空襲から逃れられる疎開先を探したいと思っていたのだと思います。義兄が少し郊外の尼寺の離れが空き家になっているという情報を得て、その離れにしばらく住まわせてもらうことになりました。義兄が福井県庁に勤めていて融通が効いたので福井ではあまり食べ物には困りませんでした。お米も沢山あり、たっぷりのお砂糖も義兄がどこかから仕入れてきました。一度桃を持ってきたことがありました。珍しかったので、みんなで食べようと期待したのですが、義兄が雑に風呂敷に入れてたため、桃が全部潰れてしまっていたことがありました。男性だから果物の扱いは苦手だったのだと思います。しかし、義兄はそうやって私たちのために色々と尽くしてくれました。しかし、私の実の兄は真面目人間だったので、義兄が役得で色々なものを仕入れてくるのが嫌いだったみたいです。

8月15日の玉音放送は疎開先のその尼寺で尼さん達と姉とで聞きました。ラジオからの声は割れて、何を言っているかよく分かりませんでした。戦争が終わったことは分かりました。それまで、勝ち続けていた日本が負けるということは考えたこともなく、敗戦したことは信じられず、とても残念で呆然とし、涙が出ました。姉も同じ気持ちだったと思います。

終戦後は、両親は父の生まれ故郷である愛知県の知多半島の先端にある師崎（もろざき）というところに住みました。父の兄弟が小さい家と小さい畑を貸してくれたのです。東住吉の家は長兄が住むことになっていたのに、終戦で帰ってきた2人の兄と私はその師崎に両親と一緒に住むことになりました。海の直ぐそばで、家から海が見えるいい所でした。部屋は二間でしたが畑もあって、みんなで仲良く暮らしました。家の近くには漁師がたくさんいて、取り立ての魚や生きたタコなどをもらって食べましたが、どれもこれもとても美味しかったのを覚えています。その後、一人の兄は明電舎で働くことになり、もう一人の兄は農業大学を出ていたのに農業を

することになりました。私は近くに女手が無いということで
実家の手伝いをしながら、結婚するまでの3-4年を母の実家
であった同じ愛知県の羽塚町で過ごしました。



母（ゆき）と 母の上京時

羽塚町の家近くに、将来の夫となる昇太郎の母の妹が住んでいました。昇太郎の母（義母）は東京に住んでいましたが、時々羽塚町に遊びに来ていました。私のことを「しっかりしたいい子だ」と言ってくれ、東京に住む昇太郎と会ってみたらどうかと言われ、会うことになりました。夫の一家は早くに父を亡くし、夫の兄が世田谷の上馬で酒屋をやっていました。父のいない家族を支えるため、義兄が丁稚奉公の後に酒

屋を開き、一家を支えましたが、とても苦勞したと聞いています。当初、私の実の兄たちは夫との結婚を反対していました。サラリーマン家庭と商売人の家庭は環境が違うので、結婚後に私が苦勞するのではないかと心配していたのです。私は勤めたこともなく、その違いがどのようなものか、よく分かりませんでした。が、そうこうしている内に夫との縁談話は進み、夫に会いに東京に行くことになりました。確か兄も一緒に付いて来てくれたと思います。当時は新幹線もなく、愛知から汽車で6時間くらいかけて東京に行きました。

夫と東京で初めて会った時、夫は私をお寿司屋さんに連れて行ってくれました。終戦直後なので贅沢なお店などありませんでしたが、その時のお寿司は目が飛び出るような立派なお寿司でとても美味しかったのを覚えています。二人でどんなことを話したのか、は全く覚えていませんが、夫の姉が色々仲を取り持ってくれ、とても楽しい時間だったことは覚えています。その夜は阿佐ヶ谷に住んでいた下の姉のところに泊まりました。

愛知と東京はとても離れているので頻繁に会うことは出来

ず、一度会っただけでしたが半年後には結婚しました。近所の知り合いの方の口利きだったことと、夫の印象が良かったので安心して決心しました。

当時は今の様な豪勢な結婚式を行う時代ではなく、私たちは夫の姉が新橋で経営する焼き鳥店のお座敷で結婚式を行いました。そのお座敷は比較的広かったのでそこに互いの両親を呼んでご馳走を食べました。

結婚生活のスタートは義姉の店の 2 階でした。新橋で有名なニュー新橋ビルはまだ出来ていませんでしたが、義姉のお店は後のニュー新橋ビルの向かいにありました。木造の 2 階建てで、焼き鳥やフライ、酢の物やお刺身も出すお店で、店の名前は義姉の名前である「よしこ」でした。私たち夫婦の部屋はお店のお座敷との兼用でした。お客さんが多い時はお座敷として使い、それ以外の時は私たち夫婦が使っていました。その頃から新橋はサラリーマンが多く、お店はとても繁盛し、忙しかったです。



左から私、義姉、義母、夫、義姉の夫

1 年くらいしてから義姉が私たち夫婦のために近くにお店を出してくれました。新橋の SL 広場からすぐの場所で、同じく木造 2 階建てでした。義姉は夫と私のことをとても可愛がってくれた上に、親切にもお店まで出してくれ、とても嬉しかったです。新しいお店の名前は「多古」という名前にしました。多古という名前は夫が付けましたが、特に意味はなかったと思います。メニューは義姉の店と同じく、焼き鳥を中心にフライからお刺身まで色々と扱いました。義姉の協力もあり、お店はとても賑わい繁盛しました。長男が生まれ

たのはそのお店を始めた昭和 24 年 11 月でした。新橋の菊池病院という病院で出産しました。初めての子供が生まれたことはとても嬉しかったです。

子供がいる生活は幸せに溢れたものでしたが、お店をやっていたので、となりの座敷にお客さんがいるときなどは泣き始めはしないかと気が気ではありませんでした。お手伝いさんを雇い、お店が忙しい時などは長男を散歩に連れて行ってもらうこともありましたが、やはり小さい子供がいると少しずつ新橋のお店には住みにくくなりました。そこで、義姉が住んでいた恵比寿の家が空き家になっていたのを、義母も一緒に恵比寿に引っ越すことにしました。その頃、義姉は新橋のお店を辞めて那須で旅館をやっていました。義母は那須と恵比寿を行ったり来たりしていましたが、私たち家族も那須に遊びに行くことがあり、とても楽しく過ごしました。姉は子供がいなかったのを、後に「一人養子に出来ないか」と夫に言ったことがあったそうですが、夫は「それだけはできない」と断ったそうです。

恵比寿の家は、引っ越した当時は木造の小さな家でしたが、

修理をしたり建替えたりして、現在は 5 階建てのビルになっています。1 階は鶏料理屋さんが入り、2 階から上は住居となっています。

その恵比寿で次男たちが生まれました。双子でした。次男たちの出産は、病院ではなく自宅でお産婆さんをお願いしました。出産するまで、双子だと気が付いていませんでした。出産当日、生まれるまでの間、夫は長男を連れて散歩をしていました。1 人目が生まれた頃に帰ってきましたが、お産婆さんに「もう一人いるみたい」と言われ、とても驚いたと言っていました。それはそうでしょう。一人と思っていた子が二人いたのですから。双子を育てるのは本当に大変でした。ハイハイを始めると 1 人で 2 人を見ることが難しくなり、お手伝いさんを雇いました。お手伝いさんと私とで 1 人ずつおんぶをして外出をしたり家事をしたりしました。そのお手伝いさんはとてもいい方で、今でも仲良くさせてもらっています。恵比寿には長男が小学校 6 年生になるまで住みました。当時の恵比寿駅周辺は小さい八百屋、豆腐屋、魚屋、衣料品店ばかりで、大きなスーパーもない、普通の街でした。当時は

そういう店が集まる商店街で買い物をしていましたが、今は小さいお店は全部なくなり、駒沢通り沿いにはビルが建ち並び、1階は殆どが飲食店になりました。

間もなくして、恵比寿から中目黒に引っ越しましたが、中目黒の家は、夫が散歩に行っているときに「富士山が見える家を見つけた」と言って探してきたものでした。夫はこの富士山が見える家をととても気に入っていたのだと思いますが、傾斜地だったため、親戚には危ないと反対されました。実際、私たちが引っ越す前に斜面が崩れ、元々あった中古の家は潰れてしまい、新しい家を建てることになりました。今はマンションがたくさん建って、富士山は見えなくなりましたが、当時は富士山が綺麗に見える夫の言う通りの素晴らしいお家でした。

この中目黒の家に引っ越した頃、子供たちは小学校 4 年生と 6 年生になっていました。恵比寿から中目黒に引っ越したため、小学校も渋谷区から目黒区に転校しなければなりませんでした。子供たちは転校を嫌がったので、引っ越し後も渋谷区立の長谷戸小学校に通い続けました。

小学校卒業後、長男は麻布中学校、麻布高校から東京大学の物理専攻学科に、次男は日大桜ヶ丘高校から日本大学に、三男は法政二高から法政大学に進学しました。長男は子供の頃から勉強ができ、小学校の先生からは「こんなに勉強ができる子には初めて会った」と言われました。次男と三男も長男には一目置いているみたいで、今でも長男を頼りにしているそうです。兄弟は三人とも仲が良く、とても優しい子供たちで私も嬉しく思います。

長男（孝雄）のお嫁さんは佐緒里、三男（明良）のお嫁さんは文子と言います。最初に結婚したのは三男（明良）でした。結婚したばかりの三男夫婦は新橋のお店をずいぶんとよく手伝ってくれました。平日はお店で一生懸命に働いてお店の上で寝泊まりし、週末になると私どもが住む家に帰ってきました。お嫁さんの文子さんはテキパキとしっかりした優しい女性です。今一緒に住んでいますが、私が一人で出来なくなった色んなことをやってくれてとても助かっています。

長男は学生の頃、「静かで勉強が捗る」という理由で、長野県白馬の民宿に勉強をしに行っていました。長男のお嫁さん

の佐緒里さんはその宿の娘さんでした。長男の滞在中に仲良くなったのだと思います。佐緒里さんは物腰が柔らかかでとても優しい人です。夫とも国内旅行をたくさんしましたが、息子たちには、伊豆や九州、北海道、北陸、台湾と旅行にもたくさん連れて行ってもらい、とても楽しく良い思い出になっています。

孫たちも小さい頃はよく私の家に泊まりに来たり、年末は祐天寺の除夜の鐘と一緒に聞きに行ったりして賑やかに楽しく過ごしました。元旦には家族で大鳥神社に参拝した後、目黒雅叙園でお茶をするのも楽しい恒例行事です。

夫と二人で始まった私たちの家は、今は子供が3人、お嫁さんが2人、孫が5人、曾孫が3人の大所帯になっています。今まで大きな事件もなく、家族が幸せに暮らしているということをととても嬉しく思います。皆には今のまま、その日その日を楽しく真面目に仲良く暮らしてほしいと思います。それが一番の望みです。



夫との国内旅行にて（平成 6 年 5 月 10 日）



米寿のお祝い 目黒雅叙園にて（平成 27 年 5 月 24 日）



米寿のお祝い 目黒雅叙園にて（平成 27 年 5 月 24 日）※左から長男、次男、三男



米寿のお祝い 目黒雅叙園にて（平成 27 年 5 月 24 日） 家族の集合写真

<若い人に伝えたいこと>

私は、真面目に働き、色々なことを少しずつ積み重ね、欲をかかずにここまでやってきました。その結果、子供たちや孫たちにも恵まれた良い人生が過ごせました。

一攫千金などを目指すと大きな間違いになるかもしれません。若い人には、とにかく真面目にコツコツと頑張ってもらいたいと思います。